

蝦夷考

駒井和愛

(東京大學教授)

蝦夷が如何なるものであるかは、我々にとって重大な問題である。何故ならば、蝦夷について、日本の學界では、未だ定まつた意見がないが、海外では、例えば、中華民國の朱雲影先生の「中國文化與日本建國」の如く、日本古代に縄文土器の時代と、彌生土器の時代とがあり、前者は蝦夷の残したものと記し、この蝦夷をもつてアイヌと認めている場合がすくなく無いからである。(註一)フランスの學者の著書のうちにも同じようなことが見えている。(註二)

そこで私は日本の古典や中國の文獻に見える蝦夷のうち、どの記事が確かなもので、しかもアイヌをいい表わしているかを明かにし、如何なる時代に日本の如何なる地方にアイヌが居たか、しかもそれらのアイヌがどのような遺跡を残しているかを考えつづけて來たのであるが、最近になつて、北海道噴火灣岸の尾白内貝塚出土の人骨が、アイヌの特色を示していることの證據を得たので、ここにこのことを記して置きたいと思う。

周知のように日本本州には縄文土器の時代につづいて、彌生土器の時代があつた。北海道にはこの彌生文化とも云うべきものが無いが、續縄文文化と稱されているものが見られる。これは縄文文化が彌生文化の感化を被つて起きたようなもので、本州の東北の一部と、北海道とに行われていた。彌生文化は明かに日本人のものであり、それは次の古墳の時代にうけつがれている。縄文文化には縄文土器が、彌生文

(註一) 「中日文化論集」所收。

(註二) R. Furon, Manuel de Préhistoire Générale などにもその例をみる。

化には彌生土器が、續縄文文化には續縄文土器が用いられ、古墳文化には、土師器や須恵器が見られる。また東北から北海道にかけては土師器の影響の存する擦文土器を見ることが出来る。

さて蝦夷のことを記したものとして、杜佑の通典が注意をひく。これは唐の徳宗の貞元年間に編されたものであるから、八世紀の終りから、九世紀の始めの頃の様子を傳えているもので、その蝦夷を説いたところで、

蝦夷國海島中小國也、其使鬚長四尺、尤善弓矢、插箭於首……大唐顯慶四年十月隨倭國使人入朝。

といっている。即ち蝦夷は海の島のなかの小國で、その使のものがあごひげの長さ四尺もあり、弓矢を善くし、日本人に随つて入朝したというのである。顯慶四年は高宗の時代で、西暦六五九年、日本の齊明天皇の五年にあたる。ただ同じことを宋の宋祁の撰した新唐書東夷列傳日本の條では、日本の天智天皇二年西暦六六三年のこととしているが、日本書紀齊明天皇五年のところを見ると、唐國に使したものが東北の蝦夷男女二人を連れて行つて、唐の天子にみせたと述べてあり、日本書紀の注のうちに記されている伊吉連博德の言葉によると、使人等は二つの船で出たが、海上で遭難し、一つの船のものが十月に洛陽について、天子にまみえたことになっているので、顯慶四年というのが正しいであろう。この日本人が連れて行つた蝦夷をみて、唐の天子が蝦夷の身面は極めて奇怪であるといつたと付け加えてあるのは、注目に値するところで、唐代の蝦夷が、日本人でなくて、アイヌであつたことがよくわかるのである。

この頃から中國にも、日本で使つていた蝦夷の文字が知られるようになったが、それ以前は中國では毛人といつていた。淮南子墜形訓、山海經の海外東經、大荒北經にも北邊に毛人が居ることを記し、宋書倭國傳の倭王武、恐らく我が雄略天皇の上表にも、舊唐書、新唐書の日本のところにも、日本の東北に毛人が住んでいることを記している。何れにしても顯慶四年に唐國へ渡つた蝦夷は、我が東北のものであつたが、杜佑や宋祁が蝦夷について記して、その國が海の島の中にあるといつ

ているのは、今の北海道に居たことを示しているものである。これらの蝦夷が、博徳の書にあるように身面頗る奇怪であつたり、宋史に見えるように身面皆毛あるものであつたりするのは、これが日本人でなく、さきに云つた如くアイヌであつたことに疑が無い。さらに博徳の書によると、蝦夷は家屋らしいものを持たず、漁獵を主とし、しかも幾らか日本人の文化を取り入れていたものもあつたようであるが、この蝦夷はどのような遺跡を残しているであろうか。かつて私は唐宋時代のアイヌの遺跡として、擦文土器の時代の堅穴、洞窟、貝塚、墳墓をあげ、その遺物として擦文土器、紡錘車、骨角器、石器、鐵器を掲げたことがあつた。(註三)その理由は擦文土器の時代の堅穴から出土した木材の C¹⁴ の検査で、その時代が 850±160 A. D. 或は 880±80 A. D. 或はまた 920±100 A. D. というように、大體唐末から五代をへて、宋初の頃にあたることが知られ、その時代の人達が北海道全道と東北北部とに、家屋を造らず、堅穴に住み、文字を知らず、漁獵を営んでいたことがわかつたからである。このような時代に、日本人が北海道に數多く移住し、夥しい堅穴を残したとは到底考えられないことである。しかもこれらの堅穴に竈が設けられ、日本文化の影響の見られるのは興味あることで、私は將來、擦文土器時代の人骨を發見して、その方面から、これを残したものがアイヌであつたことを證明してみたいと考えているのである。

それはさて噴火灣沿岸の尾白内貝塚は、尾白内中學校庭に存し、貝層の上に 2m. 程、駒ヶ嶽の噴火による火山灰が蔽つている。しかも興味あるのは、この火山灰が寛永十七年 (1640 A. D.) の噴火によるものであることが知られることと、火山灰の積つていない低い方をみると、直ちに砂層であつて、貝層の無いということであつて、當時火山灰が降つても海面に落ちた場合は、堆積することが無いのであるから、いま貝塚の見られるところが、海岸の波打ちぎわで、貝塚のないところが、海であつたことが證明されるのである。(註四)

(註三) Komai Kazuchika. The Ainu in the Age of T'ang Dynasty (The Toho Gakkai, Acta Asiatica 6, 1964)

(註四) 駒井和愛、櫻井清彦「尾白内」(近刊) 参照。

この貝塚から加工品として銚や針の如き骨角器、打製、磨製の石器、續縄文土器が出土するのであるが、注目に値するのは、磨製石斧に鐵の痕跡のあるものが見出され、當時鐵器が併用されていたと云うことである。續縄文土器は縄文土器の名残の見られる鉢や壺が多い。第一圖の鉢は高さ9.5cm、第二圖の壺は高さ7.8cm.を算する。この貝塚から、續縄文土器と共に、土師器や須恵器の斷片が出土し、また貝層上部からは擦文土器の斷片も發見されるので、貝塚の年代が、我が古墳時代から、奈良時代にかけてのものであることがわかる。中國でいえば、大體唐代にあたるものといえよう。また續縄文土器が、擦文土器より古くから行われていたことは明かであるが、これら二種の土器が並行して用いられていたこともあつたと云えよう。

私はこの續縄文土器の時代の墳墓を三基發見したが、それらがアイヌのものらしく見えたので、調査を依頼したところ、そのうち頭蓋が計測出來て、アイヌであることを明示しているものが二個だけあつた。(第三、四圖)

その一つ第一號は屈葬らしい人骨の近くに續縄文土器と、打製石鏃とが見出されたものであつた。北海道大學教授伊藤昌一博士の鑑定によると、(註五)頭蓋は二十才から四十才までの間の男性のもので、日本人より大きく、北海道南部のアイヌのものとの差が無いとのことである。その頭蓋の長さ196mm.幅147mm.顔高117mm.を測り、長頭型に近い中頭型で、顔面幅廣くて、眼窩が矩形を呈しているのが特色とされる。(第三圖、第五圖、第六圖)

第二號は屈葬北枕の男女の遺骸が向い合わせに見出されたもののうち、右側の五、六十才の男性の頭蓋を指す。左側の遺骨は骨盤から五十才前後の女性のものであると思われるが、頭蓋は測定出來ない。(第四圖)

これら二體が同時に埋葬されたものか、如何かは問題になるところであろうが、その出土状態をみると、二體が極めて接近して居り、しかも一部の骨が同一面で重なり合つていて、なおかつ骨の攪亂が認められないので、ほぼ時を同じくして葬ら

(註五) 前掲「尾白内」附録伊藤博士の論文に尾白内人骨のアイヌ的特色が詳述してある。

れたとみて差支ないであろう。その副葬品のうちに實用に適さない軽石製の斧のあつたことが注意をひいた。これは明器とみるべきものである。

右側の男性の頭蓋について、同じく伊藤博士は、日本人のものより大きく、眼窩の矩形その他アイヌと同じであると言われた。頭蓋の長さ 188mm. 幅 142mm. 顔高 125 mm. を算す。なお左側の女性の頭蓋も長頭型に属するものと推定されるのとことである。(第七圖、第八圖)

以上男子の頭蓋に就いていうと、腐蝕が甚だしく、詳細なことはわかりにくい、とにかく續縄文人が長頭型に近く、北海道南部の現存アイヌのものと類似が濃いことが認められる。おそらく、いまの道南アイヌの祖系の主要な部分を占めるものと推測してよいであろう。かくて尾白内貝塚は中國の唐代頃に噴火灣アイヌによつて残されたものであることが明かになつたが、しからば我が東北北部に見られる續縄文文化も亦た、その頃のアイヌのものと言つてよいであろう。

さきに私は唐代の蝦夷、即ちアイヌが東北北部から北海道にかけて、擦文土器の文化を残したということを推測したが、しからばほぼ同じ時代に同じ地方に續縄文土器の文化を残したのも亦たアイヌであるということを如何に解すべきであろうか。

ここに於いて兩者を比較してみると、續縄文文化は石器を主として用い、鐵器も知つていたが、未だ竈を使つていないものであり、擦文文化は鐵器を主として用い、石器も使つていたが、既に竈を作つていたものとの相違が見られる。前者は殆んど農耕を行わず、後者は農耕をよくしたものであつた。竈を設けることは、日本の古墳時代に見られることで、日本文化の影響であると思われるので、この點から云えば擦文文化の方が續縄文文化より日本的であると云えよう。

このように唐代頃の蝦夷であるアイヌに日本化したものと、未だ充分に日本化しないものと兩様あつたことが明かになつたが、このことは日本書紀齊明天皇の條に見える上記博徳の書に唐の天子の間に、日本の使者が答えているところに

天子問曰、此等蝦夷國有何方、使人謹答、國有東北、天子問曰、蝦夷幾種、使人謹答、類有三種、遠者名都加留、次者龜蝦夷、近者名熟蝦夷、每歲貢本國之朝

とあることから窺えるところである。都加留は津輕のことであるが、これに就いては兎に角として、亀蝦夷と熟蝦夷との二つは留意に値しよう。玉篇卷下に龜は鼈であるといい、「不精大也、疏也」といつている。亀蝦夷は熟蝦夷に對するもので、日本化している度合いによつていつたものと思われる。しからば亀蝦夷は粗略で未だ充分に日本化していないもの、熟蝦夷はこの反對によく日本化しているものを指したものであつて、上記續縄文土器を使い、竈を知らなかつたアイヌを亀蝦夷といい、擦文土器を用い竈を設けていたアイヌを熟蝦夷と呼んだものといつてよい。日本書紀のこの文章は、東北地方のアイヌに就いて述べたものであつたが、唐宋時代の北海道アイヌにも、未だ充分に日本化しないものと、日本化したものとのあつたことは、考古學の上からも認められたところである。

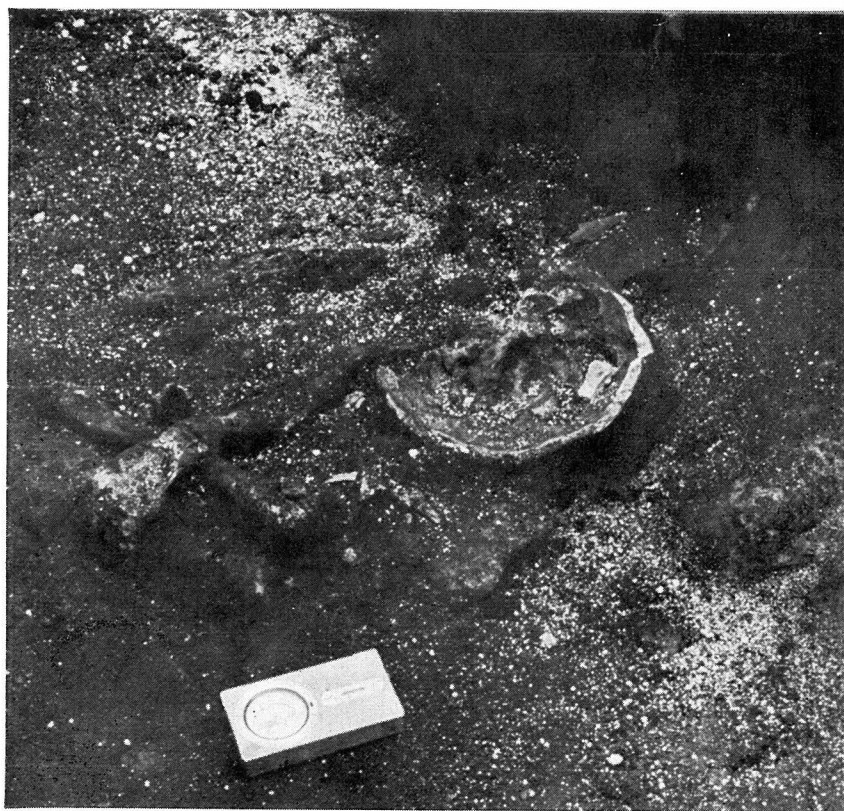
これを要するに日本書紀齊明天皇紀や通典や宋史の日本のところに見える蝦夷がアイヌであることに間違なく、その時代の北海道から東北北部にかけていたアイヌが、或は擦文文化をもつていたり、或は續縄文文化を享けていたことが知られるのである。(1964)



第一圖 尾白内貝塚出土續縄文土器。(高 9.5 cm.)



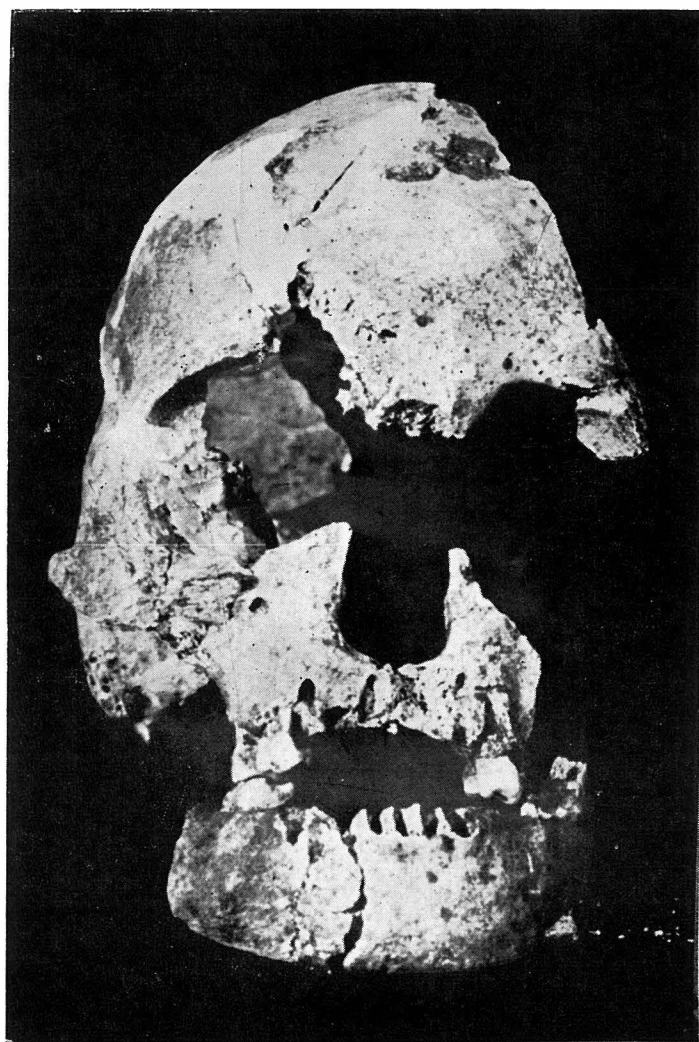
第二圖 尾白内貝塚出土續繩文土器。(高7.8 cm.)



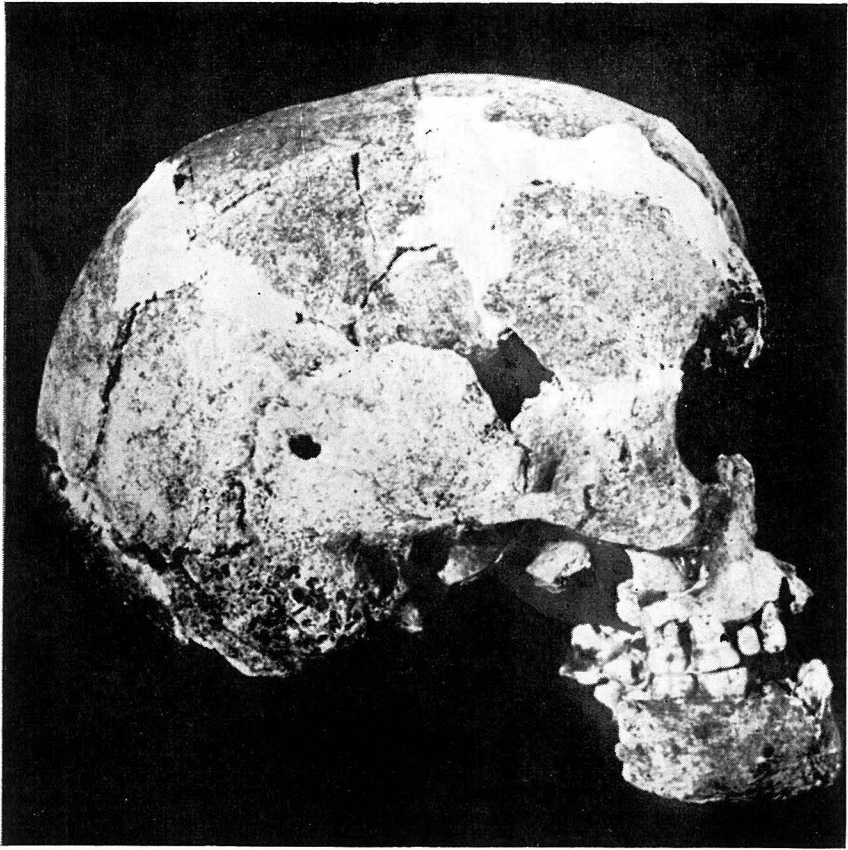
第三圖 尾白内具塚人骨出土狀況。(第一號人骨)



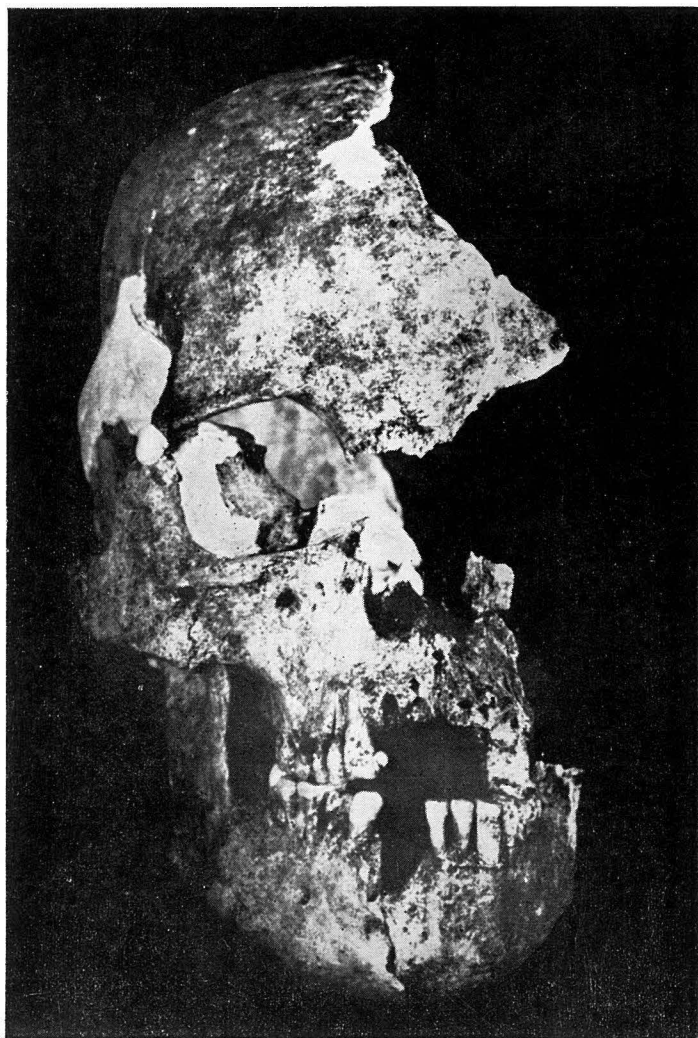
第四圖 尾戸内具塚人骨出土狀況。(第二號、第三號)



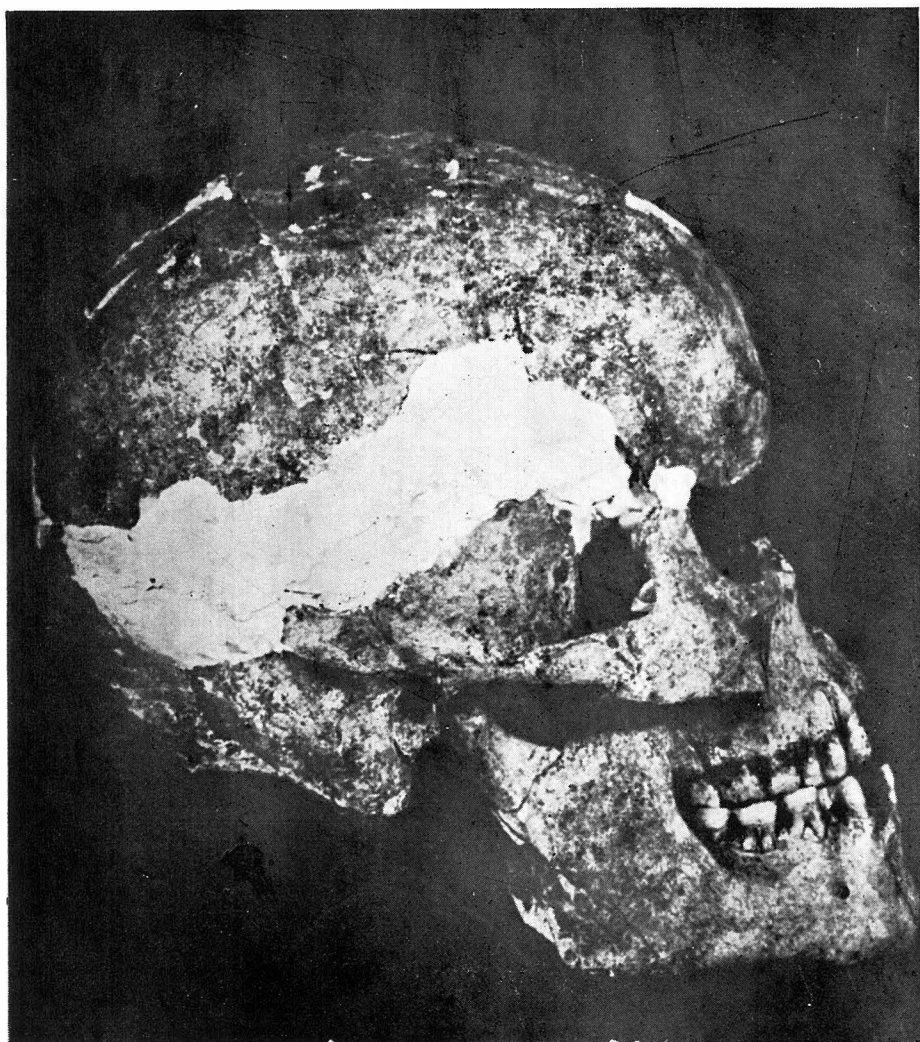
第五圖 尾白内貝塚人骨。(第一號頭蓋正面)



第六圖 尾白內貝塚人骨。(第一號頭蓋右側面)



第七圖 尾白内貝塚人骨。(第二號頭蓋正面)



第八圖 尾白内貝塚人骨。(第二號頭蓋右側面)